
神と悪魔のバシリ！2 真・恋姫†無双編

怒離留

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神と悪魔のパシリ！2 真・恋姫†無双編

【Nコード】

N68850

【作者名】

怒離留

【あらすじ】

神と悪魔のパシリ？の続編です。

まだ、あちらが終わっていないですが、投稿させていただきます。前編を読まなくても大丈夫！読者を振り切り頑張ります。

01 新たなる世界（前書き）

やってきました。次の世界！！頑張つて投稿を続けます。
コメントやメッセージは随時募集中！！

01 新たなる世界

俺「さて、次の世界は・・・真・恋姫†無双の世界か・・・」

ゲートの中の最深部、俺は一人でそうつぶやいた。

俺の目の前にはアジアらしき大陸が映し出されている。

セリ「シイル様!!」

ん？

ティ「私も行きますよ!!」

あれ？二人は留守番のはずなんだけど・・・

俺が振りかえると・・・

ドン!!

セリ・ティ「へ？」

俺「そんな馬鹿なああああ!!!!」

三人は大陸の映し出された。ゲートに飛び込んだ。

??? side

??1「今日は月が綺麗ね。」

??2「まったくだ。こんなに月が綺麗だと酒がすすむわ」

??3「ほどほどにしてください」

と三人の美女が月見酒をしていた。この三人は見晴らしのいいところで酒を飲んでいた。

??1「ん？今、空が光らなかった？」

??2「いや、確認できんかったが？」

??3「それはどの方向だ？」

ドーン！！！！

??3「なんだ今のは！？」

??2「で、光ったのはどっちじゃ？」

??1「あつちかな？」

??2「行ってみよう」

??1「そうね。」

三人の美女は隆盛の落ちたところに向かった。

Side out

俺は今、二人が俺の上にいるものの俺だけ地面にめり込んでいる。かなり痛い。とっさにテジヤスが魔法を使わなかったらヤバかったかもしれない。

テジヤス、ありがとう。

あれ？いつもなら反応が返ってくるはずなのに帰ってこない。

<魔力残量0>

へ？

おかしいでしょ！！魔力がない？

とりあえず、俺は傷を癒すために俺は息ができる状態にし、寝ようとした。

だが、三人がこちらに歩いてきた。とりあえず、このままでいよう。

???1「あ！人が倒れてる！！」

???2「待たんか！！策殿！！はあ、はあ、はあ」

???3「はあ、はあ、待ってください・・・」

三人の美女が現れた。二人は息を切らしているな。

???1「見て！冥琳、祭！！変な格好の女の子が3人倒れてるわ」

あれ？俺は男ですよ！？っていうか、ここ呉！？

???2「・・・見たことも無い格好じゃのう」

???3「雪蓮！危ないから離れなさい！！」

???1「大丈夫よ！完全に気絶しているみたいだし。」

起きてますよ・・・

???2「確かに、これで起きているとは考えられんからな」

だから、起きてますよ・・・気配をそれなりにしているからか？

???3「いいから離れましょう。まず、兵を呼んで安全を確認してから・・・」

???1「ねえ、この娘達、もしかして天の御遣いじゃない！？」

???2「管路とか言う占い師の話か？」

???3「私も聞いたな。己の正義貫いて、無敵の武神駆け抜ける、三つの悪なる流れ星。だったな」

何処のス。ーラ。ツ！？佐久間さん！！ふざけ過ぎだよ！？
ま、まあいいや。

???1「とりあえず！運んで話してみよう♪使えなかったら斬れば
いいし♪」

あゝ、なんてZ A N K O K Uなんだろう・・・

??2「ふん!!」

右手すら持ちあがらない。でしょうね。今の俺は1・5tあるからね。

??2「お、重すぎる」

??1「何やってんの？」

俺は3人が離れたところで起き上がる。

俺「俺は歩くからいい。そこの二人も俺が運ぶ」

??2「お前!!起きていたのか!？」

俺「ああ、大体話は聞かせてもらった。予言の続きを聞かせてもらえないか？」

01 新たなる世界（後書き）

シルは男で女装趣味はなく、見た目以外は普通の男です。（たぶん）

02 新たなる出会い（前書き）

初めが肝心ですよね？頑張るぞ！！

02 新たなる出会い

???3「貴様は何者だ!？」

俺「シイル・デモン・ディ・ドラコだ。」

三人「???」

俺「名前だ。俺は異世界から来たんだ。名前が全く違くてもしょうがないだろう?」

???2「お前は天から来たのか?」

俺「ここから遥か上空から来たが、天から来たわけじゃない。さっきも言ったが俺は異世界から来た。この世界については俺は知っているが、この二人は知らん。あと、俺の事を女だとか言っていたが、俺は男だ!!!」

三人「!!!!!!」

俺「なんだその驚いたという顔は!!!!俺は男なんだよ!!!!!!
いいよ、どうせ女顔ですよ・・・orz」

俺は完全に落ち込んだ、涙を流して・・・

???1「いいじゃない!可愛いなんて!女の子にもてるわよ。」

俺「ティファとセリーヌ以外に好かれなくてもいいよ・・・」

??2「その二人の女がそなたの嫁か？」

俺「結婚はしてないけど・・・ほとんどそうだな。」

??3「女だと思ったことは謝ろう。まず、聞きたいのは天の国はどんな所なんだ？」

俺はとりあえず用意していた。iP o n eで動画を再生する。

??1「これ何？」

俺「携帯電話、遠くの人と話をするもの。」

??2「やってみて！」

俺「これと同じものがないとできない。ティファとセリーヌが持っているけど気絶していたら話ができないだろ？」

??3「では、どうやって動いているのだ？」

俺は取りあえず、黒板とチョークをゲートから取り出す。

俺「こうなっている。」

チョークで書こうとすると

??2「待て！それはどこから出したのじゃ？」

俺「こういつぶうに・・・」

俺はゲートから椅子を取り出す。

???1「天の世界の妖術？」

俺「俺とセリー又しかできない。」

???3「これはどういったものなんだ？」

俺「このゲートについては後で説明しよう。まず、携帯だ。」

かなり詳しく説明をしたのだが、理解できる者はおらず、二人はダウンしていた。黒い髪の女の人はキチンと話を聞いてくれたが、分からなかったようだ。

とりあえず、話を戻して、動画を見せる。

???1「へえ・・・こんなに発展しているんだ・・・」

???2「この下を走っている小さいのは何じゃ？」

俺「自動車、本物はこれくらい大きい」

俺はゲートからR。-8を出して見せる。

???2「これは何をするものなのじゃ？」

俺「人や物を運ぶために使う。」

???1「これにはどうやって乗るの？」

俺「扉を開けると乗れるがこれはもうしまつ。」

俺はゲートに自動車をしまつ。

???1「なんでしまふのよ!」

俺「なんか壊しそう。言っておくがあれば高いんだぞ」

そもそも免許が必要だし。

???3「確かに・・・」

???2「そうかもしれんな」

俺「とりあえず、話は置いておこつ。」

???3「そうだな」

俺「さて、俺はこの二人を背負うから何処に行けばいいんだ?」

???3「私達は馬で来たんだが、馬に乗るか?」

俺「大丈夫、馬ぐらいの速さなら走れる。」

???2「お主は本当に何者じゃ?」

俺「シイル・デモン・ディ・ドラコ。呼びにくいだろ?から名前は後で考えるよ」

で、とある部屋に案内された。

???3「この世界で生きていくのにあてはあるのか？」

俺「別に生きるのには困らないだろう？俺達はお前達の下についてもいい。」

???1「あなたは強いよね！？大歓迎だね。え〜っとう」

俺「俺の名前か？悠でいい。佐々木悠。」

???1「わかったわ。悠」

転生前の俺の名前だが、これなら大丈夫だろう。

俺「真名は無いということでもよろしく！あと、字も無い！」

???3「そうなのか。いや、異世界から来たんだ、納得しよう。」

俺「で、俺は今からでも働けるが、その二人はこの文字は読めない。だから俺がティファとセリーヌの分まで働くがいいか？」

???3「構わないが大丈夫なのか？」

俺「任せておけ、書類仕事ならすぐにこなして見せよう！」

???3「明日を楽しみにしているぞ！」

おそらく、何か不思議アイテムで解決するとか思っているんだろうが俺の能力ですぐにできるんだよ。

???1「もしかして私の仕事が減る！？」

「???」それはない。」

俺「ところで、さっきからあなた達の名前を聞いてないわけなんだが・・・」

三人「「忘れてた」」

02 新たなる出会い（後書き）

短いけど、まず量だよね？というか、間違っつて先にシイルの名前を分かる没案を先に投稿してしまったorz
気にしないでくださいね？

あと、シイルの本名は作者の本名ではありません。作者の本名がかなりもしないですね。中身は一緒なんですけどね。

03 新たな誓い？（前書き）

最近更新していませんでした。

03 新たなる誓い？

???1「私は孫策。字は伯符。真名は雪蓮よ。」

???3「真名まで許すのか？」

???1「いいんじゃない？私はこの子が気に入ったわ。」

???2「儂も気に入ったが、策殿がそう言うなら儂も真名を言わねばな。儂は祭じゃ」

???3「私は周瑜。字は公瑾だ、真名は冥琳。これからよろしくな、天の御遣い様」

俺「天の御遣いっていうけどもどんな予言だったんだ？」

祭「天より二人の使者が現れる。一人は優しい心を持ち、もう一人は武に優れる。一人が目指すは理想の世界。もう一人が目指すは良い世界。二人は心やさしき者達だが、もう一人の方は正義にあらず、だが、真の正義を知る者達なり。この二人の者達が世の乱れを納める。だったかのう？」

雪蓮「大体あっているわね。」

俺「なるほど・・・俺は悪を進むということを行っているのか？」

雪蓮「あなたが正義では無い方なの？」

俺「ああ、正義というのは壊れた存在、全体を10として限りなく

小さい1を切り捨て9を守る存在それが正義の味方だ。俺は手元の1を守るために10だろうが10000だろうが切り捨てる。」

冥琳「なるほど・・・前者は確かに壊れた存在だろう。だが、お前は人間として正しいのではないか？」

俺「ああ、俺もそう思うし生き方を変える気は全くない。だから俺は悪であり、覚悟する。憎まれる覚悟、殺される覚悟をな。」

祭「儂達はどうかやらんでもないものを拾ってしまったらしいのう」

俺「消えるというのなら他のところに行くが、お前達は どうする？」

雪蓮「私達の下についてくれる？」

俺「それでいいなら俺もその方がありがたい。」

俺達は握手する。

俺「では、もう遅いから今日はこれぐらいにしよつ。」

雪蓮「そうね。」

祭「そうじゃな」

冥琳「そうだな。では、詳しいことは明日ということだ」

俺「おやすみ」

翌日・・・

俺「ん？早すぎるか？」

とりあえず、いつも通りに両腕、両足に重りをつける。

適当に散歩したら怒られるので部屋で適当に筋トレする。

飽きてきたのでDSでポケ○ンを育てる。最近、サ○ンドラを育ててます。

しばらくするとセリーヌが起きてくる。

セリーヌは目を手の甲で擦る。

セリ「ここはどこですか？」

周りをキョロキョロと見回す。

俺がいるのを発見すると俺に向かって

セリ「シイル様！」

ティ「痛！！！」

セリーヌは思いっきりティファを踏みつけて俺の方に跳んだみたいだ。

だが、ティファニアが頑丈なのは知っている。俺は大事にするけど頑丈だ。

セリ「す、すみません！！お姉さま！！」

セリーヌが俺から離れ、ティファに謝る。

おそらく、布団の中で見えなかったから踏んでしまったのだろう。いくらセリーヌが軽くてもあれは痛いよ……

ティ「だ、大丈夫ですよ・・・」

何故、怒らないのだろう？
いつもなら怒るのに・・・

ティ「シイル、私達を置いていくなんておかしいです!!」

俺「あゝ、そこなの？本体を屋敷においてきてるのにそこなの？」

ティ「きつと浮気をするつもりだと思い、付いてきたんです!」

俺「俺は嘘をつかん。この世界に好きなキャラが存在することは確かだが、あくまで一人のファンとしてだ。」

ティ「それが怪しんです!!私もゲームやりましたけどあれは何ですか!？血を入れる？ふざけるなDEATH!!」

俺「口調までおかしくなるほどか？そもそも俺を好きになる可能性が低いとは考えないのか？」

ティ「可能性。あること自体が間違いです!シイルは私とセリーヌのものです!!」

俺は心の中で俺は神と魔王のものでは?と思った。

俺「だとしてもな、俺はお前達を守るために本体を置いてきたんだ。ここには仕事で来ているんだ。」

セリ「だとしても、私達のどちらかを連れていかないのは不自然です。」

俺「分身の俺はやられても本体があるから大丈夫だが、二人は分身できなかっただろうが！！もしもの事があつたら俺はどうしたらいいんだ？」

ティ「大事にされるのはとてもうれしいのですが、悠馬さんに蘇生させてもらったらどうでしょう。」

俺「た、確かに・・・その手があるか・・・容れ物もあるし、中身の魂を操作できる魂の書さえあれば・・・ん？俺も持つてるよね？」

セリ「持っていますよ。最近、佐久間さんがくれたじゃないですか。」

俺「そうだった・・・orz」

そつ、思い出せば魂の書持ってた・・・

ティ「そもそも私達を置いていこうというのが間違いなんです！」

俺「すいません！」

土下座。最近、R2を見たのでそれに影響されてるんだろう。俺は近くにいたんだけどね。

セリ「もう私達を置いてどこに行かないでくださいね。」

俺「わかった。もう置いて行かない。」

コミケとか以外は

ティ」はじめからそうしてよ」

で、この部屋は三人が来るまで甘い空気が漂っていたそうだ。

03 新たなる誓い？（後書き）

書き終えてから反省しました、次に生かしましょう。

作者「魂の書はチート！！！」

シィ「まだあつちにも出てないんじゃないか？」

作者「忘れた。」

シィ「馬鹿！何してんだよ！！！」

作者「面倒……というか最近忙しくて暇がない。」

シィ「……理由は？」

作者「レポートで徹夜！！！」

シィ「本当の馬鹿だな……で、大丈夫なのか？」

作者「大丈夫ではありません。正直、メインのPCでレポートを書かせてください」

シィ「書けないのか？」

作者「親に冷却ファンがうるさいって言われた。寝る場所に置いてるからだろ！と思ったが言えない。」

シィ「お前が使う部屋は勉強する部屋しかないからだろ。」

作者「レポートを書くために使わせてほしい。でも、使うことは稀です。何のために買ったんだろう？ディスプレイを態々増やすために買ったのに。」

シイ「どれくらいそのパソコンにお金をかけたんだ？」

作者「イエナイヨ。ソナナコト」

シイ「聞かないでおきましょう。で、これについてはいいのか？」

作者「あゝ、それ？ソレハ蒼影サンガ投稿シナイト書ケナインダヨ」

シイ「パソコンの調子が悪いとか言っていたな」

作者「せっかくメッセージをいただいてコラボだったのにザンネンだね。私もPCの調子が・・・」

シイ「嘘を言っな！このPCでゲームをやっていたのは誰だ？」

作者「私でございます！！すみません！」

頑張ります。コメントください。真面目にこれでいいのが気になるります。

04 冥琳さん、頑張って！（前書き）

最近、SM診断で俺ルールなSと出た作者です。
このままだとヤバイ結果でした・・・orz

04 冥琳さん、頑張つて！

冥琳「とりあえず、何から話そうか？」

俺「まずは俺がする仕事についてだ」

これが重要でしょ。

祭「そうじゃな、まずはその話がいいじゃろっ」

頷きながらそう言う。

雪蓮「あなたは何かができるの？」

俺に聞かれても・・・

俺「何でもできるぞ。武官、文官、どっちの仕事もこなそう。」

雪蓮「なら今から仕事をしてもらいましょう。ね？冥琳？」

なんか黒い笑みなのは何故？

冥琳「いい加減にしてもらえませんか？」

なんか冥琳さんがイライラしているな。何故なんだろう。

全「何が？」

冥琳以外が首をかしげる。

冥琳「さつきから何をしていますのですか？そこの二人！！」

セリ「シイル様の膝に座っているのですが？」

ティ「シイルの背中に胸を押しつけているのよ」

二人から回答を受ける冥琳。ツッコまなくなった俺もだんだん毒されてきているのだろうか・・・

いや、そんなことは無いはず。そうこれはいつもの事なんだ。そう、何時もの事だからツッコミ忘れていたんだよ！！

俺「自然過ぎておかしいことがわからなかった。」

祭「すでに末期か。」

何が？

雪蓮「付け入る隙がなさそうね。」

どういう意味？

冥琳「まあ、いいだろう。だが、仕事はしてもらっぞ！」

そう言われて案内されたのは机のある部屋に書簡が山のように積んでいる。ぶっちゃけどっかで見たことのある光景にそっくりです。その光景では山になっていたのは書類でしたが。

俺「で、全部を片付ければいいんですか？」

冥琳「できる限りでいい」

俺は腕をまくる。

俺「では、S t a r t U p」

セリ「9」

テイ「8」

俺は机に向かい筆をとる。墨汁を硯に流し、書簡を読む。
そして、書く。

セリ「7」

俺はすでに終わった書簡を積み新しい山を解体にかかる。

テイ「6」

次の山を片付ける。

冥琳「早い。早すぎる!!」

セリ「5」

テイ「4」

俺「T h r e e , T w o , O n e , T i m e O u t」

はい、終わり!

冥琳「すべて終わったのか？」

俺「ああ、別に確認すればいいが、俺は間違ったことは書いてないはずだ。確認を頼むぞ」

冥琳「わかった」

しばらく、ティファとセリーヌと戯れることにする。

俺「俺の領主としての仕事より楽でいいよ」

セリ「そうですね。量がケタ違いですからね。」

俺「同じ質量でもあつちは紙なんだよね」

ティ「でもかなり早くいつも終わらせてるじゃないですか？」

俺「これでも最初はゲート使ったり、ゲート使ったりで大変だったんだぞ。」

セリ「時間操作ですね？ゲートの中の一部の時の流れを早くしての」

俺「その通り。」

ティ「それで私と一緒に遊ぶことができたんですね。」

俺「そういうこと」

セリ「思っただんですけど、あんまりお姉さまとの過去のことを話さないのは何故ですか？」

俺「色々あり過ぎて話せない。」

ティ「私が話すわ！」

と昔話が始まって・・・

俺は止めて欲しかったが、止められなかった・・・orz

確認が終わったのか冥琳さんが来た。

冥琳「終わったぞ。すごいな。おかしいところなどなく正確だ。これなら任せられそうだ。どうした？顔が赤いぞ？」

俺「いや、ティファが遠慮なく話すので・・・」

冥琳「誰でも恥ずかしい過去を1つや2つ持っているものさ」

冥琳さんは胸の下に腕を組み、眉間にしわを寄せる。

俺「そ、そうですね。慰めていただきありがとうございます」

やばい、触れてはいけない話題のようだ。

正直、俺はティファにトラウマを植えつけられた気もしないでもない。

俺「他に仕事はありますか？」

一応、聞いてみる。

冥琳「わかっているのだろう？」

意味ありげな眼で俺を見る。

俺「当たりまえですよ」

誰かの足音が聞こえる。

雪蓮「もう終わった？」

俺「はい、俺の分は終わりましたよ。ね？冥琳さん？」

はいはい、飛んで火に入る夏の虫ですね。

冥琳「ああ、悠の分は終わったな」

雪蓮「じゃあ、私と戦ってもらっわよ」

俺に闘気を放つ雪蓮さん。

俺は高速で後ろに回り、両肩を掴む。

俺「いいですよ。ただし、自分の分の仕事を終わらせたら」

冥琳「そうだな。自分の分の仕事を終わらせたらな。伯符。あなた、仕事が終わってないわよ」

あれ？さっきまでの冥琳さんよりかなり怖い。何故？

雪蓮「何言ってるのよ。さっき終わらせたでしょ？」

そう、雪蓮さんは冥琳さんが確認している最中に仕事を終わらせてどこかに行ったはずなのだ。

冥琳「他人の分に自分の分を混ぜるのは終わったとは言わないわ。」

そう、雪蓮はあのだった10秒の間に自分の机の書類を俺のこなし
ている書類に混ぜたのだ。

雪蓮「え？な、何を言っているの？」

冥琳さんがすごく怒っていらっしやいますね。俺は逃げますか。

俺「俺は祭さんを捕まえてきます。」

俺は逃げた。

雪蓮「ちょ、ちょっと！逃げるなんて卑怯よ！！」

冥琳「悠は逃げてないわよ。あなたは仕事をしましうね。」

ティ「逃げようなんて考えないでくださいね。骨の1、2本は覚悟
してくださいね？」

ティファは殺気を少し出した。

雪蓮「な、なんでこうなるのよ！！！！」

しばらくして祭さんが連れて来られきちんと仕事をしました。俺はその間三人で遊びながら監視した。冥琳さんからお金を貰った。明日は必要なもの街に買いに行けとのことだ。

正直ありがたい。

次の日

朝に書類の仕事を終え、街にでる。
服屋に行き、ブラジャーとか下着類を代わりに売ってもらうように交渉。後で届けると約束し、店を後にする。
おそらく、すぐに出回るだろう。
出回るといいなあ・・・

その後、大剣を10本、弓と矢を買って、城に戻った。

04 冥琳さん、頑張つて！（後書き）

作者「いいよね。シイルはチートで」

シイ「何を言っているんだ？」

作者「私もチートが欲しい！ゲートが欲しい！！時間が欲しいよ！！」

シイ「なんだよ急に？」

作者「試験が・・・」

シイ「自業自得だ」

作者「orz」

05 ゆっくり進む！（前書き）

最近、ゼロ魔編がかなりハイスピードで話が進んでしまったのでゆっくり進めようと思います。ゼロ魔の補完の話は不定期ですが、こちらができる限り4日位で更新したいですね。

05 ゆっくり進む！

今日も朝から書類仕事をしています。

ここまでの確認のだが、名前が元のままだとこの世界の人達は呼びにくいので。俺は悠ゆうティファニアは唯ゆいセリー又は美晴みはるという名前を付けた。

ちなみに全員名字は佐々木。

俺は現在いろんなものを販売中。売ったものは方位磁石、野菜、食料、塩、酒、香辛料、下着類などだ。

鉄を製鉄、加工する技術をかなりの大金で売りました。もう少ししたらおもしろいことになるでしょう。

今日やることは……

俺「冥琳さん、時間いいですか？」

丁度、冥琳さんと雪蓮が一緒にいたので話しかけてみた。見たところ説教しているわけでもなさそうだし大丈夫だろうと思ってだ。

冥琳「なんだ？悠。今日の仕事は終わりか？」

俺「終わったよ。というか話があるんだが。」

雪蓮「私にも聞かせてくれる？」

話を聞きたそうですね。わくわくしないでほしい。

俺「雪蓮にも話さないといけないんだ。えーっと、学校を作りたいんだが許可をくれない？」

雪蓮「学校？文官でも育てるの？」

雪蓮がいきなり厳しい顔になってる。

俺「いや、民のすべてに最低限の教育をしようと思ってさ。」

冥琳「それは、民に余計な知恵を与えるのか？」

冥琳さんの顔も厳しいな。反乱しないかとか言うのだろうか・・・

雪蓮「民に余計な知恵を与えればいつか民は反乱をおこすわ。」

なるほど・・・で？

俺「無駄ではないと思う。これから言う話を聞いてから考えて欲しい。」

冥琳「それはおまえの国の話なのだろう。聞かせてみる」

のってきたね。

俺「ある小さな国があった。国の頭は神の子孫といわれ崇められた。民のすべてに教育をという理由で学校を作った。始めはあまり人が来なかったが、子供のすべてに教育を施すようにした。」

雪蓮「馬鹿な国ね。すべての民に知恵を与えるだなんて」

冥琳「それでどうなる？」

俺「すべての国民は国の頭を崇めるようになった。もともとこの国

はその頭のことを神だと皆が信じていた。それが教育によって強められた。」

冥琳「なるほどな。」

雪蓮「???」

分かっていないんですね。雪蓮さん。

俺「この国は戦をした。軍は小さいが強かった。」

冥琳さんは分かったみたいだな。

冥琳「実に興味深い話だな。」

雪蓮「???なにが?私には何が何だか分からないんだけど?」

俺「つまり人間はあるものを信じて戦うことでとても強くなる。つまり宗教とかで神のために自らを捨ててまで勝利をもたらす狂人達を教育で作っていたということだ。」

雪蓮「???」

冥琳「つまり、人間は強く信じることでとても強くなるということだ」

雪蓮「や、やっとわかったわ。って言うか難しい話をしないできちんと説明してくれないかしら?」

頭使おうよ。そんなに難しい話ではなかったよ?

俺「教育が逆に反乱をさせなくするということだ。」

冥琳「そう言うことだ。分からないなら。後で説明してあげましょう。悠。学校の件は認めるわ。その件は後で話しましょう。他にはある？」

俺「孤児院を作らせて欲しい。あと、最近、人身売買を行っている奴らを裁くから、事後の処理の書類は回してくれ。」

冥琳「わかった。では頼むぞ。」

俺「はい」

俺はシュタツと消えてみた。

雪蓮「なんか、私より冥琳の方が敬われてない？」

冥琳「気の所為だ。それより、私に話があつてきたのではないの？」

雪蓮「そうだ！！倉の酒が無くなっていたんだけど！！何処に行つたの！？」

冥琳「悠が全部持つて行つたぞ。いつでも必要な時は出してやると言っていたから全部持つて行かせ「なんですって！？」・・・悠は酒を飲まないらしいから何かに使うかあの不思議な術でどこかにしまふのだろう？」

雪蓮「城下の酒屋も買い占められてるし！！悠！！酒を飲ませなさい！！！！」

雪蓮は悠を探しに走ってどこかに行ってしまった。

冥琳「やれやれ、私の部屋に置いてある分があるというのに」

その後、悠は雪蓮に捕まった

05 ゆっくり進む！（後書き）

作者「死にそう。」

シィ「どうしたんだ？」

作者「そろそろ中間試験で精神的に追い詰められているんだ」

シィ「日頃勉強をしないからだな。」

作者「わかっている。わかっているんだよ」

06 カミサマは誤字ではありません。(前書き)

かれこれ10日近く更新してなくてすいません。とても忙しいので大変です。でも、止める気はないので頑張ります。

06 カミサマは誤字ではありません。

人身売買の商人達を物理的に殲滅した。

学校や孤児院を造るために、私塾を買収する今日このごろ。

最近の書類に袁術のものもあるのは気のせい？

俺に都合のいいように書いているけど大丈夫だろうか・・・
大丈夫だね。

コンコン

誰かな？書類はもう今日の分は持つてきてもらっているし、冥琳さんかな？

俺「どうぞ」

冥琳「入るぞ」

冥琳さんだった。と・・・あれはもしかや！！

冥琳「実はお前に紹介したい者がいてな」

俺「そ、そちらの方ですか？」

とても丁寧に聞いてみる。

冥琳「ああ、そうだ」

俺はとても感動しています。この世界に来て本当によかった！！！！

??「はぁい。私は性は陸、名は遜、字は伯言です。真名は穩つていいます。穩つて呼んで下さいね。」

俺「俺は佐々木悠と名乗っております。私のことは悠とお呼び下さい。」

ヤベ・・・テンパっちゃった。まきさんの声に緊張しまくりです。

冥琳「私達の時より丁寧じゃないか？」

いや、あの時はそうだったけど・・・今、目の前に（心の）神様が存在するんだよ!？」

俺、あの声で頼まれたらお願いなんでも聞いちゃいそう・・・俺と同じ声だけど・・・

冥琳「年も近いようだし、仲よくしてやってくれ」

俺「ちよつと待て、俺の歳は数えてないが40代後半のはず（精神的年齢とゲートで過ごした年月を考えて）だ」

冥琳「嘘を言うな!!どこにそんな10代の肌をした40代がいるか!..」

ここにいますよ・・・って俺、吸血鬼ですよ・・・あと、そんなに怒らないで」

俺「その話は置いておいて、冥琳さんが紹介しに来たということは何かあったんですか？」

冥琳「いや、特にないが?お前が来てから私の仕事はかなり減った

から私が来たただけだ。駄目だったか？」

話を変えられたぞ！！やった！！

俺「いえいえ、そんなことはないですよ。会えてとてもうれしいですよ。」

微笑んでみる。

二人とも赤くならない……

少しさびしい……

穏「私が来たのは天から降ってきたという御遣いさんがどんな方なのか気になったから冥琳様から紹介してもらったんですよ」

この独特の喋り方が素晴らしい。声を聞くだけでとても癒される。

俺「天から降ってきた……落ちてきたんですよ。とても痛かったですから……」

穏「そうなんですか？でも、大丈夫そうじゃないですか？」

穏様が俺を観察しています。胸が揺れてる？

俺「体は頑丈なので。冥琳さん、さっき書類を確認していたんですけど。これって袁術のとの書簡じゃないの？」

冥琳「それか？いつものことだ。適当に出しておいてくれ。」

なんか疲れた顔をしていますね。が、頑張って冥琳さん！！
俺は応援しているよ！！

俺「わかりました。馬鹿の書類は適当に処理すればいいんですね」

冥琳「その通りだ。はあ」

幸せが逃げますよ。ほら、穏を見て。癒されて！

穏「冥琳様、苦勞なさっているんですね・・・頑張ってください。
もう少しで馬鹿が居なくなるはずですから」

冥琳「そ、そうだな、こちらは悠もいることだし勝てるよな！？」

あれ？冥琳さんが壊れた？

俺「あのー、どうかなさったんですか？」

丁寧伺ってみる。

冥琳「あの馬鹿め、最近私達がお金を貯蓄するから使わせようとして。あの馬鹿は絶対消す！！」

・・・・・・ヤバくね？

穏「そ、そのいきです！冥琳様！」

冥琳「悠も協力してくれるな！」

俺「俺は協力するよ。そのためにここに来たんだし・・・」

ヤバイ、本当は二人のカミサマが居るからここに来たなんて今更言えない・・・orz

冥琳「なら、今度、袁術のところに行ってくれないか？」

俺「え？」

冥琳「お願いする！！あいつら馬鹿すぎてもう嫌だ！！なんとかしてくれ！！」

話が飛びすぎて訳わかれ。

06 カミサマは誤字ではありません。(後書き)

作者「最近、HEL。SINGをみました。シルはあんなにチー
トではありません。アー。ードさんtueee!!」

シィ「ちょ、ちょっといいか？」

作者「何？」

シィ「俺にあの戦い方を強制しないよな？」

作者「出来ないでしょ？だって再生があんなに速くないし、痛いの
駄目だし」

シィ「だ、だよな」

作者「そудだよ、そんなことさせないよ(黒笑)」

シィ「そ、そудだよな(いや、絶対何かさせる気だ)」

作者「何を疑っているかわからないがさせないよ？本当だよ？」

シィ「何故疑問形なんだ!!」

07 更新しなくてすいませんでした。(前書き)

作者「前話のすぐ後に書いてはいたんです。」

シィ「ほう〜(怒)」

作者「本当にすいませんでした!!!」

シィ「謝って済むか!!!」

07 更新しなくてすいませんでした。

えゝ前回の話から分かりますと思いますがアホに会いに行きます。

俺「すいません、袁術様はこちらにいらっしゃいますか？」

兵士1「そつだが？何ようだ？」

俺「私は佐々木悠といいますが、あの、周瑜様に謁見するようになされたのですが、今は大丈夫ですか？」

兵士1「わかった通っていいぞ」

俺「どうも」

俺は馬鹿の部屋に入つたのだが、部屋の豪華なこと豪華なこと・・・

俺だつたらこんな悪趣味な部屋に居たくもないね。

まわれ右して帰りたいが、冥琳さんからの頼みだ。こなさなければならぬだろう（泣）

あのお子様袁術か、っていうことはあの青いのが・・・誰だっけ？俺は片膝をつき頭を下げる。

袁術「お前誰じゃ？」

俺「私は佐々木悠と申します。孫家に仕える文官でございます。」

袁術「で、その文官が何の用じゃ？」

俺「孫家の使いでやってきたのですが。そろそろ孫家を再興させていただけませんか？」

袁術「何を言っているのじゃ？まだまだ恩は返せておらんぞ。もっとわらわのために働くがよい。」

え？ゲームではもっと先延ばし〜みたいな言い方だったのに言うのは俺だからかすごく上から目線だ。

袁術「それよりのう。最近、孫家が確保したという天の御遣いというのに会いたいのだが、会わせてくれんかのう？なにせ、武で最強なのじゃろう？わらわも興味がでてきてな」

俺「はあ、私はそのようなすごい方は見たことはありません。聞いたことも無いのですが、本当にそのような方がいるのでしょうか？」

袁術「居るんじゃないかのう？居なくても天の御遣いがわらわの下に居るとなれば、わらわの威光も上がるのじゃ！」

あゝ飼い殺す気ですね・・・

まあ、あなたに従う位なら地図上からこの地を消してもいいかも。

???「そうですね。美羽様に天の御遣いの威光があれば無敵ですよ！美羽様に威光があるかは置いておいて」

後半がすごく小さいが俺には聞こえたぞ。

袁術「もっと褒めてたも！」

あいつアホだ、本当の馬鹿だ。とりあえず、盗聴器でも仕掛けてみ

ようかなとか思ったけど要らないよね。

俺「袁術様、すいません。もし、その天の御遣いを連れてくれば孫家を独立させていただけますか？」

袁術「考えてやるだけならいいぞ」

はい、馬鹿ですね。その手には引っかかりませんから・・・

俺「いえ、独立させていただけるならあなたの前に連れて来させましょう。別に私も本当に居るかは分らないのです。連れてくるにしても最強の者をここまで連れてくるのです。それ相応の対価は必要です。ですから。ここに連れてくれば独立を本当に考えていただけますね？」

袁術「くどいのじゃ！早く連れてまいれ！！」

俺「御意」

俺はそのまま下がっていった。

そして、さっきまでの内容を冥琳さんに話したら

冥琳「馬鹿もの!!」

バシン

殴られました。

で、長々と説教されました。

とりあえず、そのあとにこれからこのことの説明をした。
分かっていただけないものの作戦通り、俺、冥琳で袁術のところに行った。

雪蓮は行かないらしい。いいものが見れるかもしれないのに・・・
ビデオでも撮影しておきますか。
もちろん俺は一回着替えた。

俺「さてと、どれくらい面白いことになるかな？」

俺達二人が袁術の前に通され、俺達は頭を下げる。

袁術「そなたが天の御遣いか？」

俺「はい、そのように言われております。」

正直こいつに頭を下げるだけで苛々する。

袁術「そなた、わらわのものになれ!」

俺「拒否させていただきます」

袁術「何故じゃ!?! わらわは袁家の当主なのじゃぞ!?!」

俺「まず、俺がここまで来たのだ。孫家の独立を考えてもらおうか？もちろん、はいか全力で支援させてくださいのどちらかを選べ」

俺からとても黒いオーラがでる。

???「美、美羽様！？ひ、非常に不味いのでは!？」

俺「早く答えてもらおうか？」

兵士が部屋に入ってくるが俺の殺気で後ずさる。

袁術「わ、わらわを助けよ!！」

兵士1「わ、わあああああ」

兵士2「無、無理ですうううう!！」

兵士3「すいません!！」

兵士たちは逃げだした。

俺「袁家は何？俺は貴様を認めてないし餓鬼は何言っている？死ぬか？消えるか？それとも孫家の独立を全力でやってもらおうか？」

袁術「す、すまぬ、な、何でもするからゆるしてたも!！」

あゝ漏らしたんですね。二人とも・・・

汚いので離れますけど威圧感を変えませんよ。

俺「その言葉確かに聞いたぞ」

言霊はもらった。さっさと帰ろう」

俺は帰ろうと思ったのだが

ガシ

俺は手を掴まれた。

冥琳「私達を置いてどこに行くのかしら？」

腰を抜かしていました。仕方ないので冥琳さんを抱きかかえた。い
わゆるお姫様だっこ。

冥琳さんが赤くなつてとても可愛かったです。

07 更新しなくてすいませんでした。（後書き）

更新の方がだいぶ遅れて申し訳ありません。

現実の方が忙しかったのでこっちのことができませんでした。

更新の方はまだ遅れると思います。が年末までに2話は書きたいですね。

書いてる途中、張勳の名前を忘れてて、出すにさせなかったんだけど、最後まで書く必要なかった……

後で修正したい個所がいくつかありますが、修正するのは未定です。

08 8話だといつことさえ忘れていた（前書き）

更新遅れてすいません。現在インフルエンザでダウンしている作者です。

08 8話だということさえ忘れていた

袁術の様子を撮ったビデオを雪蓮に見せると・・・

雪蓮「あははははははは！！傑作！！！！あははははははは！！！！」

床に転げまわりながらとても面白がっていました。

そんなに笑うことなくねえ？

穩「宿敵がこんなふうになれば誰だって笑いますよ」

ニヤニヤしながら爆笑するのを陸孫様はこらえている。

祭さんはすでに笑いすぎて苦しそうにのたうちまわっている。

俺「祭さん、しばらく無理そうですか？」

祭「くっ、ははっははははは！」

まだ、駄目なのか・・・

でも、爆笑する姿で結構人が見えるなあ・・・
ビデオを見ての周りの反応。

雪蓮↓転げまわって爆笑

祭↓爆笑しすぎてむせる↓転げまわって爆笑

穩↓爆笑しすぎないように抑える。でもいつも以上にニコニコ
ティファ↓誰もいない場所で大爆笑してた。

セリーヌ↓笑わない（何がおかしいかわからない）

セリーヌの首を傾げた顔がとても可愛かった。
何故わからないのかがとても気になるな。

後日、書類が来て袁術の領地の一部を貸してもらえることになった。買い取り価格が馬鹿みたいに高かったので俺がお金を出した。

一括で払った時の袁術の顔が忘れられないな。ちなみに買い取りでなく借りた場合の納めるお金は馬鹿みたいに高かったのでかなりイラツと来て買い占めました。俺はおまけとして蜜蜂を周りの国々から買い占め、蜂蜜の価格を思いっきり引き上げた。

しばらくは効果がないだろうけど、いづれ効果が出るだろう。

さて、俺が呉（買った領地）でやった主なことは、蜜蜂の大量飼育、保存食の販売（漬物、干物）、俵物を他国に輸出、農具の支給などだ。

蜜蜂の飼育は野菜の栽培に大きく役立つため、時期により巣箱を貸し出す。ゲートの中でも多くの巣箱を保存している。保存食の方は海に近いことが理由だが、塩漬けや俵物が多くできるそのため、簡単に作ることができる。塩の作り方は俺が教えたので効率もいい。ちなみにここで役立ったのが意外にも原作で出ていた『僕にも出来た！楽しんで儲ける海のコ・ミ・ツ』だったりする。てっきり俺もあれは海賊やり方の本だと思っていたら、俵物の作り方だったんです。ということとは、実際は無く普通に海賊の本だったんですけど、後ろの方に俵物で儲ける方法が書いてあった。

セリ「俵物というの何ですか？」

ティ「今更ですか・・・というかまだ日本史のことをやっていないの？」

セリ「すいません、お姉さま・・・まだです。」

シィ「俵物は昔に日本が清に輸出していた煎海鼠、干鮑、鱧鱈だ。

俵に詰めて輸出したからこの名になったといわれている。」

ティ「さすがシイル！物知りね！」

シイ「いや、高校の単位のために覚えた内容の中にあっただことなんだ」

ティ「でも、それって必修だったの？」

シイ「えーっと、それは・・・」

セリ「シイル様のことですから毎回良い点をとっていたんですよ？」

い、言えない、常に赤点ぎりぎりだったとは言えない。

シイ「そ、それなりだったよ」

平均的に見れば平均点だったよ。
戦国時代の武将とか覚えただけ、テストに一切出なかったときは泣いた。

ティ「そうだったの」

ヤバイ、バレテル！

話を戻そう

俺「蜜蜂の巣箱はどれくらい集まった？」

セリ「20000箱です。」

え？2万？

俺「そんなに？」

セリ「はい」

ゲートの中にミツバチが存在する世界ができました。

08 8話だといつことさえ忘れていた（後書き）

皆さまもインフルエンザに気をつけてくださいね。
では、またノシノシ

09 スリースラスターで！（前書き）

最近、アストレア1/144を製作しています。疲れる・・・

09 スリースラスターで！

冥琳さんに許可をもらって作った寺子屋に俺が居るんですけど、子供に勉強を教えながら山のように積まれた書類をこなすなんて無理じゃね？俺のそばに置かれた木簡の山を見るとそう思えてしまう。寺子屋の中には60人近い子供と30人近い大人達が居る。子供達には領主からの命令で勉強をしてもらうのだが、ここにいる大人たちはお金がなくて勉強できない人たちで遠くから来ている人たちもいる。

教える内容は文字の読み書き、算術、歴史だ。歴史は昼の給食前後で行うため確実に行く。歴史が教えられなければこの寺小屋もなくなるのでこっちは必至なのだが、教えている生徒から文字の読み書き、算術の方を優先してほしいという声が多い。はつきり言っているがメインなのでそれはできないのである。

子供の親達は子供という労働力がなくなって困るという半面領主からの命令、二食の給食があるので通わせている者も多い。熱心に寺子屋で勉強して文官になり、収入が多くもらえる者も増えるはずなのでこれから大事だろう。寺子屋で使用している黒板、教科書は俺が用意したものなので教科書はもちろん紙だ。教科書は大事に使用してもらい、授業のたびに配り、回収している。教科書がなくなることはないのかという何冊かはなくなったが、重要なことは黒板や俺が話すので完全に誰かが使うことはできないだろうと思っている。歴史の教科書だけは配ってそのまま。なくなろうが困らないしむしろ読んでくれる人が増えるところが助かる。

俺「ふと思ったんだが、子屋じゃないよね？」

冥琳「今更だな。増改築にいくらかかっていると思っっているんだ？」

やれやれという感じだが、成果が出てるんだからいいだろう？

俺「知らん、半分は俺が出しているんだから文句言うなよ。これから間違いなく成果が出る。これからだよ」

冥琳「その前に我々が敗北すれば終わりだ。」

俺「だから俺達3人が防衛に出ているんだろう？被害は今のところ最小に抑えているし、賊も減っただろう？」

冥琳「だとしてもだ、本当の軍隊が来たらいくらお前でも防衛できないだろうが！！」

俺「本当にそう思うか？ティ・唯や晴海だけで十分だあの二人だけでもこの世界は統一できる。だが、お前達はそれを望まないだろう？」

冥琳「た、確かにそうだが、本当にお前達は何者なのだ？」

俺「天の御遣い、それで充分だろう？」

最近疲労からか頭がおかしくなっているな・・・そろそろ休むか・

冥琳「そうだな」

俺「そつちで音をあげている二人が仕事をやらずに逃げたら酒は無いと伝えてくれ」

冥琳「どこに行くんだ？」

俺「疲れたから寝るんだよ。最近忙しすぎだ。冥琳さんあなたもきちんと休んでおけよ」

冥琳「そうだな、だけど私は休むわけには」

俺「休め、穏、冥琳にどんなことがあっても休暇を作らせる仕事をさせないでくれ！」

言ってから思っただけど敬語が・・・

ん？穏さん？顔が赤いのはどうして？また、フラグなのか！？

俺は急いで部屋を出て自分の部屋に逃げた。

ベットに倒れこむと眠気から一気に深い眠りにつく

ティ「疲れた・・・」

セリ「そうですね・・・」

二人がゲートを使い部屋に帰ってくる。領地の防衛で疲労がたまっているのだろうかかなり疲れているようだ。

ティ「私はこっち」

セリ「では私はこっちです」

ベットで寝ているシイルをティファニアが仰向けに寝かせるとシイ

ルの右側に腰掛ける。セリーヌは左側に腰掛ける。

ティ「おやすみなさい。シイル」

ティファニアはシイルに軽く口づけするとシイルの左腕を枕にシイルに抱きついた。

セリ「おやすみなさいませ。シイル様」

セリーヌもシイルに軽く口づけするとシイルの右腕を枕にシイルに抱きついた。

二人は疲労からすぐ深く眠りについた二人の顔はとても幸せそうだった。

09 スリースラスタ―で！（後書き）

感想をお願いします

10 噛み様最高！！（前書き）

アヴァランチアストレアダッシュは完成しました！
早いうちに次の話をかけるといいなあ・・・

10 噛み様最高！！

夜の暗さに蝋燭の淡い光が部屋を照らす。部屋には俺と冥琳さんと二人つきりだ。羨む人もいるかもしれないが、それは木簡の山がなければの話である。

冥琳「護衛してもらいたい人物が居るんだが」

冥琳さんから聞こえる筆の音から書類仕事はきちんとしているようだ。

俺「護衛してほしい人物？」

俺は木簡をやっつけながら聞き返す。

冥琳「ああ、雪蓮の妹の孫仲謀だ。」

ああ、噛み様か・・・え？

俺「全力で護衛させていただきます。」

俺は勢い良く返事をした。それはもうやる気あります！みたいな感じで。

でも、木簡は進めている。

冥琳「そうか、引き受けてくれるか。」

えーっと、嫌な予感かなりするのは気のせいですね？俺はちらりと冥琳さんを見ると笑顔で仕事を進めている。その笑顔の顔から

嫌な予感がする。

冥琳「じゃあ、頼んだぞ。一人で護衛よろしくな。悠？」

俺「は？何を言っているんですか？」

冥琳「一人で孫権様のところに行ってきてお連れなさい」

俺「何故俺一人？」

冥琳「人手が足りないからだ。お前なら書類仕事をしながら護衛もできるだろう？」

え？無理ですよ（笑）

あれ？強制イベントの予感・・・

俺「逝ってきまーす」

冥琳「気をつけて行けよ！」

優しく見送る姿はとても美しいが、やってることはとてもえげつない。

俺は多くの荷物をまとめゲートの中へと歩いて行った。

ゼロ魔の世界ではガンダムを使って世界中を回り、ゲートの展開できる場所を増やしたが、この世界ではどこに人の目があるかわから

ないため（ゼロ魔の世界ではゴーレム生成でごまかせるから）呼び出せない。つまり、徒歩で孫権様のところに行かねばならないみたいだ。俺は平野を走り、山を登り、下り、川に大きな橋をかけて孫権様が居る所まで徒歩で行った。孫権様に会う前にゲートの中に入り身を清めてから会いに行った。

門番や役人に雪蓮、冥琳からもらった書簡を見せ、今、孫権様が居ると思われる玉座にいる。装飾は少なく、小さな土地の領主のような感じかもしれない。

部屋に黒髪の肌が褐色ぽい女が現れたと同時に天井から僅かだが足音が聞こえた。おそらく二人は孫権様の護衛の甘寧と周泰だろう・
・たぶん・・・・

??「周瑜様からの依頼で来たということですか？」

丁寧に聞かれるところを見ると全然信用していないわけではないみたい。もしくは俺程度なんて軽くひねれるなどか思っているの油断かもしれない。

俺「周瑜様からの依頼で来ました、佐々木悠です。」

俺は頭を下げ、挨拶をする。

甘寧「私は孫権様に仕える甘寧だ」

あちらは構えを解かないで自己紹介をする。部屋の奥から音がするなあ・・・

??「貴女が天の御遣いね。」

なんか違和感を感じざるを得ないんだが・・・

機の所為だよね？

俺「はい」

俺は深々と部屋に入ってきた孫権様に礼をする。

甘寧「孫権様！まだこの者が本当に孫策様の命で来たのかもわかりません！」

やっぱり、あの人が・・・声でわかるよ

俺「書簡はここにあります。俺は孫権様を呉に安全にお連れするよ
うにとの命でここに来ました。後、この書簡をお受け取りください。」

孫権様は俺の手から書簡を受け取ると内容を読み始める。

時折、可愛く顔を赤くしているが、どういふことなのだろうか？俺は内容を読んでいなのでわからないが、嫌な予感がするので一刻も早く帰りたいと思った。

孫権「わ、わかりました。私を呉に連れて行ってください。兵の移動の準備に2週間はかかりますが、その間よろしくお願いします」

え？なんかとても丁寧に俺に話しかけるのを見ると、とても嫌な予感がするんだけど雪蓮さんはなんて書簡に書いたの？俺も知りたいんだけど・・・

この時、書簡の内容を確認しておけばこんなことにならなかったとこの後、後悔することになるのだが、それは別の話・・・

孫権「明命出てきてちょうだい」

??「はい」

天井から落ちてきた女の子は着地し、孫権様に頭を下げた。

その女の子は背中に太刀を背負っており、長い黒髪はとても美しかった。大和撫子ってこういう感じかもしれない。目は俺をしっかりと見ている。警護のためだね？いろいろな思いが窺えるその目は俺にとっては嫌な感じがした。

孫権「彼が天の御遣いの佐々木悠だそうよ。彼は最強の武将らしいわ」

さっきの違和感は気のせいみたいだね。だって俺の事、彼って男だってわかってるみたいだし。

??「そ、そうなんですか!？」

甘寧「この女が!？」

俺は男ですよ甘寧さん……

涙が出そう……

??「わわ!!この人泣いてますよ!？」

俺「俺は男ですよ。甘寧さん。」

甘寧「え!？そ、それはすまない。いや、顔立ちが女だったからなだが、その程度の事で泣くなど軟弱だな。」

わ、わかってはいるけど辛い……

俺は涙を流しながら訂正する。

俺「俺は男ですよ・・・貴女だって他人に言われたくないことを一つや二つあるでしょう!？」

甘寧「そ、それはすまない」

俺の気迫に負けたのか少し甘寧さんは足をひいている。

孫権「なんか可愛いわね・・・(ボソ)」

??「でもきれいな肌、きれいな髪ですね・・・触ってもいいですか？」

俺「いいですよ・・・」

黒髪の女の子は俺の肌や髪を触ってくる。特に気にしてケアしたことはないのだが、良いシャンプーや良いボディーソープは使うようにしている。

ところで自己紹介していただけないんですか？

孫権「そくだ、そろそろ自己紹介をしましょう。私は、姓は孫、名は権、字は仲謀よ。」

だから、何故あなたはあわてているんだ？貴女はそういうキャラじゃないでしょ？

??「私は、姓は周、名は泰、字は幼平です。」

やはり周泰さんか。とても俺を見る目が怖い気がする・・・

甘寧「私は、姓は甘、名は寧、字は興霸だ。」

周泰さんより怖い気がしないのはさっきの事があったからだろうか？

俺「俺は佐々木悠。天の御遣いなので本当の名前はシル・デモン・デイ・ドラコと言います。真名は無いですよ。」

孫権「わ、私達はあなたの事をなんて呼べばいいの？」

俺に聞いてくる姿は頬を赤く染めながらもじもじと俺に聞いてくる姿はとても可愛い。転生前なら飛びついてしまうかもしれないけど。今の俺なら記憶やデータとして取っておくだけだ。後でループしてみよう。

俺「悠でいいです。この名前を気にしているので」

孫権「わ、わかったわ」

どうしてそんなにおどおどしながらしゃべっているんだろう？やはりあの書簡が原因だと考えるのが正しいと思うんだけど・・・すごい気になる！

10 噛み様最高！！（後書き）

バイトが忙しいわけではないけど、書く暇がない・・・
誰か時間をください！！

編集しました。

自分で気づいたので、間違いを訂正。

書簡は手紙や書状のこと

木簡は木に書いたもの（ここでは書類のこと）

10 孫権様から見てのこと（前書き）

読みづらいかもしれませんが勘弁してください。

10 孫権様から見てのこと

孫権様 side

姉様からの手紙に書かれていた天の御遣い。彼らは袁術からの独立を成し、呉を独立させた。呉は天の御遣いに守られて大きく成長した。

私から見ても呉の成長の仕方はおかしい。おそらく今までの歴史の中で一番の成長の速さだろう。それほどに成長は凄まじかった。同じく急成長を遂げる蜀を越えてなのである。私は呉を独立させ、国に成長させたその天の御遣いの彼に会いたかった。会って礼をしなければならなかった。袁術からの独立は私達だけでもできただろう。だが、国にするにはとても大きな時間と労力が必要とする。その中で今までの国の在り方を変え、新しくする。冥琳も彼に仕事を増やされたけど彼はそれ以上に働いてくれる。いったいどれくらい働いているのかしら？でも、会ってみればわかるわよね。そろそろこっちに来る頃だろうし、私も仕事を片付けておかないとね。

私が木簡の中身を確認していると文官が戸を叩いたので中に入るように言った。

文官「孫策様から使いの者だという女が来ました。」

女？姉様の手紙では武神の天の御遣いである彼（男）が来ることになっっていたはずだけど・・・

孫権「女なの？男じゃなくて？」

文官「間違いなく女だと思います。どうしますか？」

私はとりあえずその女の特徴を聞いた。黒い髪に肌は透き通るように白く、瞳は黒。着ている服は男のものだが、明らかにその顔は女であり、声も男性のものだとしたら高すぎる。胸は無く背丈は私と同じくらいらしい。武神であるならば武器を思っているだろうと思ったのだが、武器は携帯しておらず、女の文官に持物を確認してもらったが武器は持っていないかったそうだ。

体術使い？いや、それほど強いのなら思春と明命が気付くはず・・・本物ではない？いや、会ってみよう。思春と明命が居る以上下手なことはできないはずだ。私も念には念を入れてしばらく観察するでしょう・・・

天の御遣い（仮）は堂々としており、思春が殺気をぶつけてみても一瞬も動揺しなかった。

変だ！普通の者なら・・・いや、相当な武人であってもあの殺気を受ければ一瞬は動揺する。気付かなかった？そんなはずはない、動揺しなかった？そう考えるのが妥当だ。

あの女は相当強い。それも思春や明命では倒せない。そんな人物が私を殺しに来る？いや、普通に考えてみれば、あの女が3人の天の御遣いの誰かなのだろう。他の二人は女だと聞いていた。だけど、あの美しさは無いのではなからうか・・・

さらさらと風に揺れる髪的美しさは同性の私でさえ惚れそうである。そして、その目はどこまでも深く優しい感じがする。ふと、目が合ってしまい。私は出ていくことになった・・・

彼女から受け取った書簡には彼が男だと書いてあった。私はまず疑った。そんなバカなはずはない。彼女が仮に彼だったとしてあの美しさはなんだ？女の私がこういうのもなんだけど、あの娘の美しさには惚れてしまう。それが男？しかも、彼が武神であり、天下最強の天の御遣い・・・

信じたくなければ思春と闘わせる・・・いいかもしれないわね・・・私は一呼吸置いて彼女の前に姿を現す。

孫権「貴女が天の御遣いね。」

なにか考えているようだ。私が出てくるのが意外だったのかしら？

??「はい」

彼女は深々と私に礼をした。私に頭を下げる様子から私に敵意がないこと、私への敬意が表れていた。おかしい。この人が私を敬う心が分らない。会ったこともない私にそんなに敬意を持つなんて・・いや、この人は私に頭を下げたときだけでも隙だらけだった。何故？なんでそんなに私を信用できるの？

思春「孫権様！まだこの者が本当に孫策様の命で来たのかもわかりません！」

思春、貴女はわかっているはずよ。この者が敵ではなく本当に姉様達の命でここに来たことが・・でなければ、私達の前に一人でくるはずがない。そして、あの純粹な敬意。

??「書簡はここにあります。俺は孫権様を呉に安全にお連れするようにとの命でここに来ました。後、この書簡をお受け取りください。」

私は彼女から封筒を受け取った。材質は紙であり高価なものだと思われる良いものを使っている。封筒を開けると手紙が3枚入っており、1枚目は姉様の字でこう書いていた。

『目の前にいるのは呉を独立させた男であり、私は呉に彼の血を入りたいの。だから貴女の協力が必要な。彼が気に入ったらいいから。貴女も頑張ってね。何度も言っけど彼は男よ。名前は佐々木』

悠というわ』

正直、信じられなかった。彼女は男だった。間違はなく女の私から見ても綺麗である。ただ、麗人というには、顔が幼く見えるそういう印象を受けるが、まさか、彼女は、男だった。彼は男！？いや、落ち着くのよ。私と自分に何回も言い聞かせていた。

私のことを見ているんだけど、その仕草が可愛い・・・いや、気のせいよ。心を落ち着けなきゃ。

2枚目の手紙は冥琳の字でこう書いてあった。

『彼は優秀だ。呉のためには彼が必要不可欠だ。だから、孫権殿には来ていただきたい。いや、来ていただけなければ困る。現在、部屋を埋めつくさんばかりの木簡が私と悠を襲っている。このままでは彼はいなくなってしまうかもしれない。だから来てほしい！』

彼が居なくなるのは非常にまずいわ・・・ところで！って何！？姉様からの手紙を考えると彼の気を引けてこと？そ、そんなこと私にはできないわよ！

3枚目は祭の字でこう書いていた。

『頼りない性格と見た目じゃが、そなたは氣にいます。じゃから、頑張ってくれ。主に儂のために！そして、彼には二人の妻が居るので頑張つてのう』

何を言いたいのか理解できないわ。二人も強敵が居るの！？私にどうしろっていうのよ！

私は自分にそんな自信は無いわよ！

とりあえず、彼のことを本当に男だというのは納得できないけど。理解はしたわ。

孫権「明命出てきてちょうだい」

控えているはずの明命にも紹介しないといけないわよね

明命「はい」

天井から明命が下りてきた。礼をすると、悠に向き直った。

孫権「彼が天の御遣いの佐々木悠だそうよ。彼は最強の武将らしいわ」

なぜかホツとしているみたいだ。もしかして私が彼と言ったのが原因かしら？

明命「そ、そうなんですか!？」

思春「この女が!？」

見た目は女の子よね。本当に・・・

明命「わわ!!この人泣いてますよ!？」

え!?!な、泣いてるですって!?!ちょ、ちょっと!!可愛すぎるわよ!!!

悠「俺は男ですよ。甘寧さん。」

思春「え!?!そ、それはすまない。いや、顔立ちが女だったからなだが、その程度の事で泣くなど軟弱だな。」

思春があんなに戸惑っている姿は久しぶりだ。どうしたのかしら？

悠「俺は男ですよ・・・貴女だって他人に言われたくないことを一つや二つあるでしょう!？」

思春「そ、それはすまない」

思春が丁寧な謝っていた。

孫権「なんか可愛いわね・・・(ボソ)」

明命「でもきれいな肌、きれいな髪ですね・・・触ってもいいですか？」

悠「いいですよ・・・」

明命が彼の長い黒髪を撫でるたびにとても良い香りがした。香水かしら？女の子っぽいと思うわよ、それは・・・でも、このさらさらな髪はとても羨ましいわ・・・

孫権「そうだ、そろそろ自己紹介をしましょう。私は、姓は孫、名は権、字は仲謀よ。」

見惚れていたけど、自己紹介をしなきゃいけないわよね！

明命「私は、姓は周、名は泰、字は幼平です。」

明命は同じ黒髪ということであの髪と張りの良い肌がうらやましいのだろう。私もそう思う。あれは、男だというのは忘れてしまいうだもの。

思春「私は、姓は甘、名は寧、字は興霸だ。」

さっきのことが後ろめたいの？さっきまでの覇気はどこへ行ったのかしら？

俺「俺は佐々木悠。天の御遣いなので本当の名前はシル・デモン・ディ・ドラコと言います。真名は無いですよ。」

真名がない！？天の世界から来たからかしら？天の国には真名がないのね。

しいる・でもん・でい・どらこという名前も天から来たのなら納得だわ。

孫権「わ、私達はあなたの事をなんて呼べばいいの？」

俺「悠でいいです。この名前を気にいっているの」

孫権「わ、わかったわ」

もし、彼の血を呉に入れるとしたら結構大変かもしれないわね・・・だって、彼があまりにも美しすぎるから・・・

10 孫権様から見てのこと（後書き）

眠いよ・・・

最近、目の前のことしか片付かない現実が辛い。

11 眠い・・・（前書き）

久しぶりの投稿になってすいません。まだ、忙しいのであまり投稿のスピードを上げることはできませんが、頑張ります。

11 眠い・・・

「そういえば、お土産を持ってきたんですよ」

「え？」

俺は持ってきたカルピス原液とビール瓶を荷物から取り出す。

俺はどちらも冷えたものに再構成し、コップを三つ取り出し、カルピスを二つある程度注ぐと、冷えた水を取り出し、カルピスを割る。その後、マドラーでかき混ぜるとゲートから氷を出し、入れる。

「「「!!!!!!」」」

三人は殺気を出しながら戦闘態勢を取る。

「はいできましたよ。」

「その透明なものは何だ!？」

甘寧さんは俺に氷が何かと聞いてくる。

「氷ですよ。見たことないですか？」

俺はゲートから氷のかけらを取り出すと口に入れる。

「いや、そういうことを聞いているのではない!何処からそれを取り出したんだ!!!」

「こつやつて?」

俺はゲートから飴の入った瓶やP。P、水筒、魔法瓶を出して見せた。

「ね、姉さまは知っているの?」

「書簡に書いてなかったの?俺のことについて書いてくれていると思ったから使ったんだけど・・・」

「書いてなかったわ」

「きつと、あとで驚かせて反応を見ようと思ってたんだな。」

「そうかもしれませんね」

甘寧さんはすぐに体勢を楽しにして殺気を出すのを止めたみたいだ。それを見て、あわてて周泰さんも構えを解く。だが、警戒しているようだ。

「とりあえず飲みませんか?信用できないなら俺が一回飲んで確認しますか?」

「その必要はないわ。あなたはそんなことをする必要がないはずだもの」

「そうですか?案外、俺が偽物で毒殺を狙っているかもしれませんよ?」

「なら何故貴方は思春と明命の殺気にまったく動じなかったのかし

ら？」

「なるほど、良く見ていたんですね。」

「ええ、二人の殺気を浴びてまったく動じていなかった。つまり貴方は動じる必要がないと思えるほど強い。」

「良い観察眼なのか？こんなに落ち着いているのは少しおかしい気がする。」

「強さは状況で変動するものですが、俺は二人には負けませんよ。」

「俺より強い存在ならいくらでもあげられますが。基本的には俺は最強のはず・・・」

「で、では！試させていただきませんか！」

「周泰さんはそう言ってきたので」

「いいですよ。何処で戦いますか？そちらが有利な状況の方が俺も楽しめるので」

「私も参加していいか？」

「甘寧さんですか。ま、武人が自分のの武を貶されたなら普通怒るよね。」

「俺も努力はしてきたけど、人間にとっての修練とは違うから複雑だ。」

「どうぞ。二人で協力して戦っていただいても結構です。」

俺はコップにビールを注いで、甘寧さんに渡した。

「ありがとう」

ゴクゴク

「おいしい！」

なんかすごい顔がキラキラしているんだけど・・・

俺はコップにビールを注ぐとゆっくりと味わうように飲んでいた。

「孫権様もこちらをいかがですか？」

「いただくわ」

俺はカルピスの入ったコップを渡した。

ゴクゴク

「おいしい」

「周泰さんもうですか？」

「いいんですか？」

「どうぞ」

俺はカルピスの入ったコップを周泰さんに渡すとまず一口付けて。

「甘いです!」

「喜んでもらって私もうれしいですよ。」

「こ、この飲み物はもうないのか?」

甘寧さんそんなにビールが気に入ったんですか?

「いえ、ありますよ。」

俺は330mlの瓶ビールをたくさん出すと床に置いて行く。その様子を甘寧さんはキラキラとした目で見ている。甘寧さんってこんなキャラだっけ?

「思春、それはおいしいの?」

「はい!とても美味しいです。蓮華様もどうぞ」

甘寧さんは自分の持っているコップに冷えたビールを注ぐと孫権様に手渡す。

孫権様は少しビールを観察し、少し飲んでみた。

「に、苦い……」

「おいしいですよ」

甘寧さん……そんなに強く言わなくても……

「私には合わないみたいだわ」

「そうですか？とても美味しいのですが・・・残念です。この良さが分かってもらえないとは・・・」

「ほ、ほら、これお酒だから！私はお酒苦手だから！」

「フォロー？というか。孫権様はお酒苦手なのか・・・メモメモっと考えてみれば、ゲームでは平気でお酒呑んでたような・・・気の所為だよね？」

「そうでしたね。とても残念です」

「で、でも、いづれ慣れるわよ」

いや、それは無いんじゃないだろうか？苦手な人は苦手だし。

「気に入られましたか？」

「ええ、とても良いものをいただいたわ」

ビール以外ですよ？

「お気に入られたようでうれしいです」

「貴方は何を・・・何ために呉についたの？一から国をあげることもできたはずよね？」

それは俺の仕事じゃないからね。天下統一はおまけだしね。

「私には王の器は有りません。だからこそ、呉に仕えるのです。それに我々の目的は武をあげることでも天下を統一させることでもあ

りません」

「貴方の目的とは？」

俺は人差し指を立て口元にもっていき、右目を閉じる

「禁則事項です」

「言えないことなのか？」

「いえ、おそらくいても信じられないことを目的にしているのて説明が面倒なだけです。それに、私は呉が天下を取るまでは仕えさせていただきます。」

「何に誓ってだ？」

「我が愛する者達に誓ってですかね」

ティファとセリーヌに誓う。彼女ら以上に俺に大事なものは無いからね。

「武に誓ってとかではないのか？」

「私はあまり興味ないです。私にとって大事なのは愛する者達と自分だけですから」

「武神なのか？」

「それは私が名乗ったわけじゃないですからね。」

「そうなのか？管路が言っていた占いではそう言っていたぞ」

「管路が武神と名付けたのではないでしょうか？」

11 眠い・・・（後書き）

書き方を変えました。意見の方をお願いします。

12 武神？ダイズ「言わせねエ！」（前書き）

眠いよ、助けて・・・

12 武神？ダイズ「言わせねエ！」

現在、森の中です。

昨日挑まれたので、一対二で戦うことになったのですが・・・

朝

早朝の鍛錬の後にゲートで家の風呂に入ってから客間でゲートから出したできたて朝食セット（和食）を食べていると女官から書簡が渡された。

俺「内容は・・・」

今いる砦から北に約10kmの森の中心が戦う場所のようだ。二人を見つけてそれぞれの額に巻きつけた鉢巻を取れば俺の勝ちのようだ。

ゲーム原作では祭、穏、一刀が兵士を引き連れて周泰さんを捕まえるというものだった。さて、俺は彼女たちを見つけられるのだろうか・・・

俺は朝飯を食べてから少し休憩し、ゆつくりと森に向かった。

森の中心は動物たちの気配がしない。つまりその辺りいるのだろう。俺は気配を森に溶け込ませ、動物が出すような音だけを出して目的地に向かった。

二人の気配は確かに全くしない。いや、消しすぎているためにかえって不自然な気配になるのではなくあえて少しだけ気配を残しているようだ。普通の人ならあれに気付けないよ。

俺は二人の仕掛けた罠を解き、新たに俺の罠を仕掛ける。フェイクをかなりの数仕掛けてみた。いざというときの逃げ道を潰すためである。

ゲートからクマの皮を出し、それを着る。普段なら液化崩壊によつて体を熊に作りかえるのだが、仕方ないのでこうする。ちなみに熊は森に入ったときにいた熊だ。

ある程度は熊のふりで二人に近づく。気配が一瞬大きくなった。

！？

気付かれた！俺はすぐに皮を脱ぎ、木に登る。

皮に手裏剣らしきものが投げられていた。NINJAだと！？

俺は持っている武器がないので手裏剣を回収しに行く。

毒が塗られていた。マヒ性毒だけど有りなの？

俺がまさか手裏剣を取りに来るとは思っていなかったのだろう二人は俺の隙を狙っていたのであえて僅かな隙を作ったのだが・・・

「引つかからないか・・・」

そう声を発した瞬間。俺は甘寧さんの鉢巻を取った

「！！！！？」

甘寧さんはすかさず俺のいる位置に手裏剣を投げていた。手裏剣の中には煙玉がいくつかはいつていたので手裏剣は回収して煙玉は撃ち返した。周泰さんはこの隙に逃げようと思っていたのだろう。だが、甘い。俺は見えない煙の中を気配をたどって気配だけで鉢巻を奪った。

「え？」

「では！あゝ「逃がすか！！」

声を発したら、声と違う方向から手裏剣が飛んできた。
どういうこと？とりあえず、気配を頼りに逃げる。

道の途中のあからさまな罫、道端のバナナの皮という芸人魂をくすぐるような罫に精神を削りながら俺は森を抜けた。

12 武神？ダイズ「言わせねエ！」（後書き）

戦闘？そんなものは有りません。

13 お酒の力は偉大です（前書き）

現在s p - オーバーブースト（チュ - ハイ）を発動中
いける！やれるよ。私！

13 お酒の力は偉大です

私はどこ？ここは誰？迷子になっていない俺はシイルです。
昨日の遊びで俺は勝利しました。で、納得する方はいないと思うの
で再戦です。

え？期待してない？そんなこと言わないでください。

前回の話はお知らせを編集したから更新にならなかったなので、適当
に代案を出しただけだよ。

決して10分で書いたものじゃないよ。ホントウダヨ。

「作者死ね！！」

『死ぬか！！！全力で拒否する！！』

というやり取りがゲートの中で行われたため、再戦。え？どうなっ
てそうなったかって？

20分くらいで適々ゲフンゲフン書けたら投稿しようとか思ってた
いよ。いつもそうだった？そんなはずないよ！！いつも誤字脱字は
見てるもん！

闘技場

「お前の実力を見させてもらう」

と甘寧さんは鈴音を構える。その刀？はとても濃い殺気を放ち俺を
殺そうとしている。

前回のがそんなに納得いかないの？

「今度こそ勝たせていただきます」

魂切を構える周泰さん。それは完全に刀だよね？え？太刀？太刀厨
おゝ『言わせねエ！』酒でテンションあがりすぎだろ。出てk

シュン

危ない！思考を他に向けたら斬られた。手裏剣が投げられるのをキ
ヤツチ！

現在の持つっている武器。回収した手裏剣×20、その辺の兵士から
借りた剣×1のみ

普通なら勝てる気がしません。私だからこれでいいですけどコレは
無い。

俺が剣で周泰さんに斬りかかると、甘寧さんが手裏剣を投げ、キャ
ツチする間に周泰さんに斬られる。見事なチームプレーだけど、良
く考えたらあなた達忍者じゃないよね？江賊だよね？どうやって覚
えたの？俺も覚えちゃできるよねそういえば……

とりあえず、回収した手裏剣を二人に向かって10ずつ投げる。回
避のために避けるようだが……甘い。

手裏剣が増えた

1から10へそして、どこからともなく現れるナイフ。

これぞメイド忍法。ごめんねさくy『寝みい』黙れ駄目作者！！
知らない人は東方をググってね。できれば咲夜さんでいいよ。

弾幕は結構薄目なため二人には避けられました。そして消えるナイ
フ……

剣で同じことをしても芸がないだろうから……

「避けてくださいよ……秘技、ツバメ返し！！」

多次元屈折によって一瞬にして3回斬る技だが、俺は能力で起こしてみた

「何だと！？今のはなんだ！！」

「一瞬にして三回斬った？」

「良く見えたね！ほめてあげるよ」

「どうやってやったんだ！？」

「実際に俺だけが加速して三回斬ったんだけど、人間の目ではそれが一瞬にして三回切ったよう認識してしまうというものだ」

事実、フレームレートとはわかるだろうか？人間はアナログなものだが、人間の目で写し取ったものを電気信号にして脳に伝達し、確認できるまでの時間には個人差は有るものの大体同じだ。違うのは見たものを処理する脳なのだ。だから、人間の目での一フレームに一回切って、次のフレームで一回斬り、その次で一回斬れば擬似燕返しの出来上がり、もちろんサーバントのような人間ではないものには通用しない。人間の目を持ち、人間なとして脳を持つものだけに通用する技である。

良い点としては構えがいらぬこと。弱点は加速するため俺が疲れること（面倒くさい）

「もう終わっていいよね？」

そうだった瞬間二人の武器は・・・

パキン

折れてしまいました。

「何!？」

「そ、そんなあ!!」

後で直すしておけばいいだろう。

今はその悲しみを覚えておいてね。

構えを解かずに構えているのはすごいけど、もう降参してよ

「あとで直すから」

こんな感じなのに隙がないのはすごいね。

「本当ですか!？」

周泰さんが笑顔になって聞いてくるけどやはり隙が全くない。

「ああ、だから降参」

ガキン

二人に首を切られそうになったので剣を左手に持ち鈴音をクナイで魂切を受け止めた。

「「降参します」」

「はい、d

ガキン

同じかよ！

「もういいよね？」

「はい。貴方の実力は確認させていただきました」

「私の魂切直してくださいね！！」

その後、二人から武器を借り、きちんと直しましたよ。

13 お酒の力は偉大です（後書き）

酔っぱらった！？

グワングワンする！！

14 誰が化け物！怪しいt(r y(前書き)

最近調子よく話が書けるんだけどどうなっているんだろう？
書けた話はこちらではなくゼ口魔の方なんだけど、やっとアホのこ
とが書けました。今更読みたいって方いるのかな？意見よろしくで
す。

14 誰が化け物！怪しいt（ry

俺達は呉に向かい出発を開始した。孫権の治めていた領地については代官を置き、そちらに任せることとなった。

既に出発してから1週間も経っているのだが、5分の1程度しか進んでいない。食料の調達は俺がゲートから出して買ってきたと言いつ張るので食料は無くなることがほばない。お金はもらっているので、懐も温まるというものだ。時折、孫権様の護衛の御二人に鍛錬をつけると言われ、適当に凹にしているのですが、成長速度が凄まじいですね。俺は凡人なので、かなりの時間を要したんですよ。え？知らなかった？そんなはずは・・・説明してない！！まあ、あとがきで説明します。

「西に砂塵有り！！」

俺に伝えなくても・・・え？俺も出るの？

「どつという感じがな・・・」

目の良い兵が何が起きているのか見えているようだが、距離があるので、甘寧さんが偵察に行つたらしい。だけど・・・見えるよね？これ？説明しておく俺の視力は吸血鬼の能力で某正義の味方並みに視力を強化できる。あちらより優れているところとして、こちらは赤外線、電磁波などの目に見えない波を目で確認できるのであちらよりもよく見える。逆に意識しなければ視力がよすぎるわけではないので、あちらに劣る。

結果として村が黄巾党に襲撃を受けているようだ。まず、その話を

孫権様にしなければいけない。そう判断し、孫権様のところに向かう。

「悠、今、思春が偵察に行っている。もしかしたら戦わねばならないかもしれない。」

「いえ、もう既に戦わなければならないでしょう。だからこそ私はここにきました。御命令を、私が奴等に目にものを見せて差し上げましょう」

「頼むわ、私達も直ぐに行くわ」

「御意」

つと堅苦しいことを終わらせて加速しながら黄巾党に突っ込んで行く。

最初奴等は俺が武器を持っていないことに侮っているようだったが、俺は手刀で次々と胸を突き刺して行く

「次はどいつだ？」

俺は手についた血を舐めながら挑発する。

「な、なんだこいつ！？化け物だ！！」

「俺の目の前で略奪を行ったのが運の尽きだったな。死ぬ」

俺が胸を突き刺すと、次から次へと俺に敵が雪崩れ込んでくる。俺はしたいを投げつけたり、落ちている剣を投げたり、敵の首を刎ねるのに使った。俺の着ている物は既に血で染まり、髪は黒から赤黒

くなっていた。俺の目は紅く敵を蹂躪することで笑みを浮かべていただろう。油断無く、躊躇い無く、臆すること無く、喜びながら殺す。化け物だろう？吸血鬼として生まれていなければこんなにも高揚はしないであろう。俺は壊れている、だからどうした？それでも俺は俺だ。

「ば、化け物だ！！逃げる！！」

ひゅん

ぼと

そう言っただけで逃げようとしたやつは首を落とした。更生させても良いのだが、魔法の無い世界でゲートにブチ込んで更生とか面倒なので死んで詫びろ。地獄で悪魔の方々にしつかりと絞られればいいんだ。もしくは天国（地獄）で天使の方々に愛を教え込まれてこい。ハプシエル様はいつでも待っているぞ。世界に大事なものはLOVE & PEACEですよ。

俺にこいつらを裁く権利はないと思うがな。安らかに眠れ。

軍が到着するまでに俺が殺した数は1362人になった。

残り約2500人というところか？戦意はほとんどないし、あれならば簡単に勝てるだろう。俺は安全な位置で寝転がり、休みを取ることにした。

戦が終わって、俺が起こされた。

俺はスコップ片手に墓を作り、体に残っている魂の欠片から石に名前を彫って日本風の墓にしてみた。血はゲートの中で魔法を使って

落としたが、全身血まみれだったのは言うまでもない。

村の方に行くと、多くの人々に感謝された。中には俺を化け物扱いをするものもいたが、村を助けたとして歓迎された。領主を任された奴は逃げたらしいので、何人かの文官と武官をおいて行くことになった。

村長は俺に娘を二人預けると深く頭を下げられたので、会うだけ会ってみた。

「この子が大喬、この子が小喬です。」

なるほど、この二人は大喬、小喬というのか・・・どこかで聞いたことがある名なんだけど・・・

「「よ、よろしく願います」」

うん、みたことあるよ、解雇された二人だね。わかります。とりあえずテストしてみよう。

「俺は佐々木悠だ。悠でいい。お前たちは何になりたいんだ？武官か？文官か？それとも俺の養子になるか？」

「私達は貴方に仕えるようにと言われています。」

「なんなりと御命令してください」

「うん、嫌だ。命令を聞くだけなら雇えばいいだけだし、俺に利点がない。」

性的なことをしなければの話であるが、俺はこの子達に性的な興味は無いので、育てて周瑜様の右手左手にでもなってもらおう。

「そ、そんな、な、なんでもしますから!!」

「何でも!? その言葉に偽りはないな」

「!!!? はい!!」

あれ? 要らない勘違いしていない? とりあえず。

「その言葉に嘘偽りは無いな」

「はい!!」

「では、俺のために・・・周瑜様の手伝いをしてもらうための教育を受けてもらう。拒否は認めない。俺が言うのだから絶対だ。」

これからスパルタの教育が始まり、解雇された二人のチート化が始まってしまった。

14 誰が化け物！怪しいt（ry（後書き）

シルはゲートで長い間鍛錬してこの能力を手に入れたのであって、努力も無しにチートな能力をいくつも持っているわけではありません。才能もあるわけではないですし、努力している話はゼ口魔の方でのせたいです。

ゲートと吸血鬼だけでも十分チートですけどね。他のステータスは殆ど神と魔王の加護とか佐久間さんのつけた能力です。

15 体がとけr・・・とけてる！(前書き)

液化崩壊・・・

説明は・・・しなくていい？

15 体がとけr・・・とけてる！

前回の話からおそらくわかっていているだろうが、大喬・小喬はゲートの中で約100年の月日を過ごしてもらった。

「虚刀流・薔薇^{ひば}」

「全刀流・速遅剣」

大喬は体重を乗せた飛び蹴りを、小喬は持っている無名の剣から剣撃をとばしてくる。面白いのが、これだけ刀として鍛えても、刀としては完成していない。やはり、無理に完成させたからだろうか？血の剣術なので刀として完全に完成させるつもりは全くなかったが、ここまでかかってしまうと・・・自分が虚刀流・全刀流の二つを学ぶ時間よりは時間がかかっていない。つまり、俺にはこの二人より才能がないということだろう。更に言ってしまうえば、俺はほぼ完全な存在である佐久間さんに指導してもらっているが、二人は俺によって鍛えられた。

大喬には虚刀流、小喬には全刀流を教えた。

「てえええ！！」

「はあああ！！」

二人の攻撃が俺に迫るが、俺には効かない。ゆっくり見えているのにそれを回避できないわけがない。

この二人の問題はきちんと俺の教えた取りに動いているかなのだから。適当に挑発しつつ、驚くような奇策を立てて使う。たとえば・

「取った!!!」

大喬の手刀を胴に受けたと喜んでいるところを大喬は俺の体をすり抜ける。正確に言えば俺はそこにはいない。それはただの残像だ。

「てえええ!!!」

おお怖い怖い。小喬、気づいていたけど大振りな剣筋では俺は斬れないよ?え?結構大きい剣を渡しているからそれができない?やだなあ。それを見越してだよ。鞘?もうぶっ壊したから使えないよ。

「ちょ」

俺は小太刀で剣先をずらし、隙をつくって、胴に蹴りを入れると、その隙を突こうと大喬は俺に手刀を入れようとしていたのだが・・・

「ぐあ!!!」

俺は小喬の胴を足場にして瞬動、痛いだろうね。私は絶対にやられない。

俺と小喬は吹き飛び、俺はすぐに体制を整え、小喬は完全にへばっていた。

「ここまでだな」

「はい・・・だ、大丈夫!?小喬ちゃん!!!」

「痛い・・・」

壁に叩きつけられたはずの小喬は意外と頑丈らしく痛いと涙を目に浮かべてはいるものの体の方に異常は見られない。いや、あまり鍛えすぎた気がする。ま、まあ、この二人は戦わないし大丈夫だよね？とりあえず、文官として勉強させてから。ゲートをでて、呉に仕えさせよう。

「修業はもう終わりだな。これから精進しろよ？」

「「はい!!」「」

で、俺は教育という名の洗脳をこの二人に行ったのだった

15 体がとけr・・・とけてる！（後書き）

蒼影さんと話していて二人をそれぞれ刀にしてみました。元々は御神とか技術だけの剣を教えるはずだったのですが、虚刀流って一から覚えたらどれくらいかかるんだろうと思い、書いてみました。二人が、戦うことは感想やコメントがあつたらあるかもしれませんが、基本的にはありません。たぶん・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6885o/>

神と悪魔のパシリ！2 真・恋姫†無双編

2011年7月15日02時42分発行